『男子中学生のおれが不良に皮を剥かれてから、学校中の皆のおもちゃになるまでの話』

第一章　皮を剥かれる

剛の家が「たまり場」だと知ったのは、入学してすぐだった。

駅裏の古い二階建て。両親が共働きで、夜の十時までは誰も帰らない。だから、夕方になると、部活を終えた連中が、まるで自分の家みたいに勝手に上がり込んでくる。引き戸はいつも半開きで、土間には色とりどりの靴が散らばっている。スニーカーもあれば、ローファーもあった。つまり女子の靴だ。

男子だけの場所ではない。女子も集まっている。しかもしょっちゅう。三年生の派手な女子たちが、平気な顔で座敷にどっかりと座って男子と煙草を回し合ったりしている。みんな、悠斗と同じ学校の、同じ制服を着たまま。スカートを短く折り上げて白い膝を出して。教室ですれ違うあの女子たちがここでは靴を脱いで、男の家の畳の上でくつろいでいる。

その世界に、悠斗は引きずり込まれる。

教室で下校の支度をしていたら、同じクラスの健太が、肩をぽんと叩いた。

「おい、佐藤。剛さんが呼んでる」

「え、俺?」

「そう。来るかどうかじゃねえよ。来るんだよ」

健太はそう言って、悠斗の返事を待たずに、もう歩き出していた。呼び出し、というより、連行、という感じだった。断る、という発想がそもそも無かった。

着いた家は、想像していたより薄暗かった。蛍光灯が一本、切れかけて、ときどき不規則に瞬く。座敷に、剛、大和、拓海。そしてテレビでは、AVが流れていた。

「お、来た来た」

剛が、悠斗を見て、にやりと笑う。歓迎、というより、品定めの笑い方。

「お前、これ、見たことある?」

首を振る。

「じゃあ、見てみろよ」

有無を言わさず、悠斗は、テレビの正面に押されて座らされる。悠斗が座り直すひまもなく、剛はもう次のことを言った。

「お前、チンポで抜いたことあんの?」

「たまに」

「たまにぃ?」

拓海が裏返して真似る。笑いが起きる。悠斗の耳が熱くなる。

「じゃあチンポ、剥いてみせろよ」

剛が、あぐらをかいたまま、手のひらを上にして、指をちょいちょいと動かす。剥け、という合図。悠斗は、自分でやろうと、おそるおそるベルトに手をかける。

が——手が、途中で止まる。服の上から触れてみて、ん、と唸る。硬くない。縮こまっている。

その、悠斗のためらいを、剛は待たなかった。

「健太、お前が皮を剥いてやれ」

「え、俺ですか?」

「下っ端だろ」

健太が、いやそうに立ち上がる。その顔には、はっきりと「めんどくせえ」と書いてある。自分から進んでやるというより、命令されたから、しぶしぶ、という態度。

「佐藤、立つなよ。そのまま」

健太が、悠斗の前にしゃがみ込む。そして——悠斗が自分で脱ぐより早く、健太の手が、もう悠斗のハーフパンツのホックに掛かっていた。

「ちょ、待って！」

「いいから、暴れるな！」

有無を言わさず、ぐい、と引き下ろされる。悠斗は、腰を浮かせることもできず、座ったまま、膝までずり下ろされた。

「剛さん、佐藤の体を逃げないように押さえててください」

健太が、剛のほうに声をかける。剛が、座ったまま、悠斗の両肩を、ぐっと後ろから押さえ込む。悠斗は、座らされたまま、上体を固定される。動けない。その隙に、健太が、悠斗のトランクスを、一気に引き下ろした。

悠斗の下半身が、瞬く蛍光灯の下に、丸ごと晒される。

「うわ、ちっちゃ」

大和が、のぞき込んで言う。悠斗は、涼しい畳の空気に、縮こまるのを感じた。しかも、押さえ込まれているせいで、隠すこともできない。両手は、剛に取られている。

健太の指が、悠斗の縮こまっているちんちんに触れた。ひやりとする。それから、先っぽの皮をつまんで——ぐっ、と後ろへ引く。

「あっ——」

思わず声が出た。皮が、くっ、とめくれて、普段は隠れている亀頭が、初めて昼の光に晒される。

「お前、仮性じゃん。包茎かよ」

拓海が言う。悠斗は、返事をする余裕がない。

健太の手が、そのまま上下に動き始める。扱（しご）かれる。乾いた手で、亀頭を、ゆっくりと。けれど健太は、いかにも面倒くさそうに、一定のリズムで、機械的に手を動かしている。まるで、作業みたいに。

「お、立った立った」

「元気じゃねーか」

悠斗は、何もしていないのに、体だけが勝手に反応していく。テレビのAV女優が、派手に声を上げ始めた。その声と、健太の手の速さが、だんだん重なっていく。

「気持ちいいか?」

訊かれて、悠斗はこくりと小さく頷く。健太は、ふう、と息をつく。まだ、めんどくさそうだ。

そして——ふいに、腹の奥で、何かが弾けそうになった。

「あ、あ、健太、まっ——」

間に合わなかった。

びくっ、と腰が浮く。白いものが、健太の手のひらと、自分の腹に、ぱっと飛び散った。悠斗は、剛に押さえられたまま、肩で息をした。

やがて、剛が口を開いた。

「お前、」

「今日から、お前は、俺たちののおもちゃだな」

有無を言わさず、そう、決められた。

それから、悠斗は、しょっちゅう、あの家に呼ばれるようになった。

部活のあと、週に何度か。呼ぶのはたいてい健太で、理由はだいたい同じ——「剛さんが」。行けば、テレビではまた別のAVが流れていて、悠斗は、適当なタイミングで、押さえ込まれ、ズボンを下ろされ、健太か、時には別の誰かに、あれこれとチンポを確認される。

最初は恥ずかしくてたまらなかったのが、三度、四度と重なるうちに、悠斗も諦め、慣れてしまった。部屋の空気に、テレビの声に、他人の手に。情けない話だが、ある日など、剥かれた瞬間に、もう反応してしまっている自分に気づいて、いっそう情けなくなった。

そんな悠斗の頭の隅に、この時期、しきりに浮かんでくる記憶があった。

小学生のときのことだ。

四年生の夏、サッカーの強化合宿があった。山の麓の、古い少年自然の家。そこで悠斗は、上級生の妹たちに、自分のちんちんを見られてしまったことがある。

上級生の妹たち——というのは、悠斗と同じ学年の女子たちや下級生たちだった。兄がサッカー部にいる、というだけの理由で、その合宿についてきていた。風呂の時間は、男子と女子で区切られていた。悠斗は決まった時間を守れず、少し遅れてしまった。

ちょうど、女子たちが入ってくる時間に、重なってしまったのだ。

「うわっ、おちんちん見えてるよ　早く隠して！」

誰かが言った。悠斗は慌ててタオルで隠した。けれど、隠しきれなかった。その夜、女子たちの間で、悠斗のおちんちんは、ちょっとした話題になったらしい。

次の日の、着替えのとき。ユニフォームに着替えている悠斗の背中越しに、女子たちがひそひそと笑っていたのを、覚えている。

「おちんちん小さかったねぇ」

「おちんちんかわいー」

そう言われた気がする。あのときの、背中越しのくすくす笑いと、今、剛たちの部屋で浴びている笑いが、悠斗の中で、そっくり同じ形をしていた。

そして——あの合宿にいた女子のうちの一人が、今、この学校にいる。しかも、この家に、しょっちゅう来ている。派手な制服の着こなしで、休み時間に廊下を歩いているのを、悠斗は何度も見たことがある。

その女子たちの前に、悠斗が引き出されるのは——もうすぐだった。

七月に入った、うだるように暑い日のことだった。

その日も、悠斗は呼ばれて、剛の家に来ていた。座敷には、剛と、大和と、拓海と、健太。いつもの面子。悠斗は、いつものようにテレビの正面に座らされていた。

そこへ——玄関の引き戸が、がらがらと開いた。

「はろー、剛くんいる?」

甲高い女子の声。悠斗は、はっと振り返る。

入ってきたのは、四人の女子だった。みんな、悠斗と同じ学校の制服。白いブラウスに、紺のプリーツスカート。四人とも、スカートを短く折り上げていて、白い脚を出している。しかも、四人とも、可愛い。教室で見かけるたびに、悠斗がちょっと緊張するような、そんな顔ぶれだった。

先頭は、美月。三年生で、髪を明るく染めた、この女子グループのリーダー。後ろに、沙羅、千夏。そして、いちばん最後に——奈々。

奈々を見て、悠斗は、心臓が跳ねるのを感じた。奈々は、悠斗と同じ二年生で——そう、あの合宿にいた、上級生の妹の一人。つまり、小学生のときに、悠斗のちんちんを、いちばん最初に見て「早く隠して！」と言った女子。

奈々も、悠斗に気づいたらしい。にこっと笑った。その笑い方だけで、悠斗はもう、負けた気になった。

「あれ、二年生の子だよね？」

美月が、悠斗をじろじろと見る。

「剛くん、この子いじめてるの?」

「いじめじゃなく、おもちゃな」

剛が、あっさりと言う。女子たちが、くすくす笑う。悠斗は、その言葉を、教室で知っている女子たちの前で、面と向かって言われて、顔が熱くなる。しかも、制服はみんな同じ。同じ学校の、同じ制服の女子が、四人。これが——恥ずかしくないわけがなかった。

「へえ、おもちゃ」

美月が、悠斗の前に、しゃがみ込む。ミニスカートの裾が、膝の上でふわりと広がる。
美月からは良い香りがし、美月のクールで美人な顔が悠斗の目の前に来た時、ひそかにチンポが反応していた。

「ねえ、剛くん。この子で、なんか遊ばせてよ」

「いいぜ。何したい」

美月は、悠斗の顔を、下から覗き込んだ。それから、こともなげに言う。

「この子に、オナニーしてもらお」

「えっ」

悠斗は、思わず声を上げた。女子の前でオナニー。しかも、四人の、制服姿の、みんな可愛い女子の前で。しかも——教室ですれ違う、あの女子たちの前で。

「オナニー、分かるよね？ 一人でおちんちん扱いて抜くの」

千夏が、両手で握る仕草をする。悠斗は頷く。

「じゃあ、やってもらおうかなぁ」

美月が、座敷の真ん中を指す。訊く、というより命じている。

悠斗は、その場に立たされた。

四人の女子の視線が、一点に集まる。それだけで、もうどうしていいか分からなくなる。

「ほら、早く」

「恥ずかしがってないで私たちの前で脱ぎなよ」

「まさか、このまま眺めてるだけじゃないよね?」

悠斗は、おそるおそる自分のベルトに手をかける。女子たちは、その手つきをじっと見ている。悠斗が、ズボンのホックを外し、ファスナーを下ろし——そこで、手が止まる。服の上から、自分のものに触れて、ん、と小さく唸る。硬くない。むしろ、縮こまっている。こんな状態のちんちんを見られてしまう、しかも寒くもないのに。

「あ、分かった。おちんちんが勃たないんでしょ?」

沙羅が言った。図星だった。

悠斗は、小さく息を吸って、正直に言った。

「できない」

「は?」

「みんなの前だと。扱けないし、抜けない」

一瞬、しんとした。そして——女子たちが、いっせいに笑った。

「できないって何」

「まだ何もしてないのに」

「じゃあさ——」

美月が、廊下のほうに向かって、ぽんぽんと手を叩いた。

「健太、入ってきて」

「え、俺?」

「そう。無理やり勃たせればいいじゃん」

健太が、のこのこと入ってくる。その顔には、やっぱり「また俺かよ」と書いてある。悠斗は、嫌な予感がした。この展開は、初日の——あの座敷と、そっくり同じだ。

「押さえてて」

美月が、男子達に命じる。

瞬間、大和と拓海が、悠斗の両腕を、ぐっと後ろに取った。悠斗は、立ったまま、後ろ手に捕まえられる。いわゆる、護送の格好。動けない。

「ちょ、ちょっと」

「暴れないで！」

悠斗は、自分で脱ぐはずだったズボンを、結局健太に脱がされることになる。

健太が、悠斗の前にしゃがむ。そして、押さえ込まれた悠斗のズボンを、一気に引き下ろす。次に、トランクスも容赦なく引き下ろされた。

悠斗の下半身が、夕方の、まだ明るい光の中に、丸ごと放り出される。

——そして、女子たちの目に、はっきりと映る。

縮こまった、ちいさな、まだ皮のかぶったままの、おちんちん。

剥かれてもいない。立ちもしていない。ただ、縮こまって、頭を隠したまま、みっともなく晒されているだけ。それが、四人の、可愛い女子の前に、ずらりと並んだ白い膝の真ん中に、ぽつんと差し出されている。

「あはは っ」

「なにこれ、ちっちゃ」

「おちんちんの皮、かぶってる」

悠斗は、その一言一言が、刺さるように分かった。剥かれているところなら、まだ、ましだ。でも今は、剥かれもしていない、ただの縮こまった状態を、見られている。一番みっともない姿を美月たち女子に対し、いちばん最初に見られてしまった。

～つづく～